平成24年1月17日

千葉県 流山（ながれやま）市と『姉妹都市』に

能登杜氏によって紡がれた糸が『絆』となった。長年友好都市として交流を続けてきた千葉県流山市と能登町は1月17日、姉妹都市の盟約を結んだ。友好都市から姉妹都市へ―。二つの自治体の関係は、新たなスタートを切った。

「この深い歴史的縁（えにし）のもと、教育、文化、観光、経済、防災などのあらゆる面での友好と親善の絆を一層深め、将来に向けて両市町の更なる発展と住民の幸福を希求し、ここに姉妹都市の盟約を締結する」

流山市役所で挙行された姉妹都市締結調印式。読み上げられた盟約書にサインした井崎義治流山市長と持木一茂能登町長は、固い握手を交わして姉妹都市締結を達成した。

今回の姉妹都市締結は、流山市の市制45周年を機に進められた。式典には、両市町関係者のほか、同じく流山市と姉妹都市関係にある福島県相馬市の立谷（たちや）秀清市長、長野県信濃町の松木重博町長も駆けつけて締結を祝った。

井崎市長は「これまで醸成させてきた交流を深め、行政はもとより住民同士の幅広い交流が進められることを願います。そして、親善と信頼と理解を深め、互いに協力して豊かで住みよいまちづくりに寄与していきたい」とあいさつ。持木町長は「お互いの特色を理解しながら、これまでの交流をさらに活発なものとし、信頼をより強固なものにつくり上げたい」と述べた。

昭和初期、能登杜氏が縁で旧内浦町から多くの人が流山に移り住んだ。さらにその縁で昭和62年から友好都市として行政同士の交流が続けられてきた流山市と能登町。東日本大震災での支援でさらに深まった「絆」がこの日、一つの形となった。

結

姉妹都市盟約書

流山市と能登町との縁は、遡ること昭和初期、白みりん発祥の地として醸造業と舟運で栄えた旧流山町と、匠の技を各から受け継ぎ、全国に名高き能登杜氏が活躍した旧内浦町との人的交流に始まる。

杜氏集団の中でも日本四大杜氏に数えられる能登杜氏の酒造技術は、全国各地で今も高く評価されている。戦後の合成酒全盛期には旧流山町の酒造会社においても、その技を生かした製品が全国に名を馳せ、流山の産業発展の礎を築き上げた。その後、能登杜氏をはじめとした旧内浦町民は、第二のふるさととして流山に移り住み、地域の発展に寄与している。

こうした背景をもとに、昭和六十年代前半からは、流山市と旧内浦町の交流が活発に行われ、平成十七年、合併による新生「能登町」が誕生した後もこれまで培われた信頼関係を更に醸成させてきた。

そして今、流山市と能登町は、この深い歴史的縁のもと、教育、文化、観光、経済、防災などのあらゆる面での友好と親善の絆を一層深め、将来に向けて両市町の更なる発展と住民の幸福を希求し、ここに姉妹都市の盟約を締結する。

平成二十四年一月十七日

流山市長 井崎義治

能登町長 持木一茂

【写真上】流山市と能登町の間で交わされた姉妹都市盟約書　**【写真右】**盟約書に署名する持木町長と井崎市長　**【写真下】**調印式後に催された祝賀会で、姉妹都市締結を祝って鏡開き。右から立谷相馬市長、持木能登町長、井崎流山市長、松木信濃町長

関係者約百人が姉妹都市締結を祝う

姉妹都市締結記念祝賀会は同日午後6時から、市内のナプシャルズ日本閣で挙行された。関係2市2町の首長をはじめ、地元国会議員、県議会議員、流山市議会議員のほか、流山市と旧内浦町の友好の架け橋となった元流山市長・秋元大吉郎さん、旧内浦町出身の元市議会議員・東畑秀雄さんなど、流山市と能登町の政治、経済、観光関係者ら約100人が一堂に会した。

始めに、井崎流山市長が能登町との姉妹都市締結を来場者に報告。さらに東日本大震災での原発事故に触れ「放射性物質が検出されたという報道の翌朝に海洋深層水10トンが届いて、流山市民は助けられた。この恩は絶対に忘れない」と感謝を述べ、「津波で甚大な被害を受けた姉妹都市の相馬市に、信濃町と能登町から物心両面にわたる支援をいただいた。姉妹都市の絆の強さと重要性を改めて認識した」と力強く語った。

4首長による鏡開きのあと、立谷相馬市長の発声で乾杯。和やかな雰囲気の中、今後の流山市と能登町、そして相馬市、信濃町との交流についての話に花を咲かせていた。

MESSAGE

福島県相馬市
立谷秀清市長

流山市・能登町の姉妹都市締結、誠におめでとうございます。ピンチの時に体を張って助け合うのが「姉妹都市」です。流山市と能登町も、お互いが「姉妹都市である」という自覚のもとに、ますます絆を深めていただきたいと思います。信濃町、能登町と相馬市はいとこのようなものです。今後ともどうかよろしくお願いします。

長野県信濃町
松木重博町長

姉妹都市の締結を心からお喜び申し上げます。東日本大震災では、姉妹都市間の連携・支援が迅速に行われました。信濃町も平成18年の雪害で流山市から多大な支援をいただくなど、姉妹都市が災害時に大きな力になると確信しています。今後は流山市、相馬市、能登町と、さまざまな面で交流を深めていきたいと思っています。

縁

流山市と能登町の縁は昭和初期までさかのぼる。当時、流山に多くの能登町出身者が移住。人々の往来が新たな縁を生み、昭和62年からは友好都市としての交流も始まった。

昭和62年11月1日、市制20周年記念「第10回流山市民まつり」のステージで演奏する唐獅子太鼓。これ以後、旧内浦町から物産展などに毎年参加して友好を深めてきた。

みりんと能登杜氏

流山は「みりんの里」。江戸時代から現代まで続く白みりんの醸造は、関東一円にその名をとどろかせていたという。特に高い評価を得ていたのは、堀切家の「万上（まんじょう）」※と秋元家の「天晴（あっぱれ）」という銘柄だった。

その「天晴」秋元家が昭和6年、帝国清酒㈱とみりん醸造工場の賃貸契約を締結し、15年に同社に買収された。帝国清酒は23年に東邦酒類㈱と名称を変更。能登杜氏の技を生かした合成清酒「東菊」を中心に焼酎「天晴」「ハイチュウ」、「コリー・ウイスキー」などの数々のヒット商品を生み出した。

9年に帝国清酒の常務取締役となった中口政吉氏（旧内浦町字上出身）と工場長として17年に着任した中口氏の実弟、橋本菊二氏（布浦）の活躍で、東邦酒類は当時、業界大手5社の一角を占める大企業に成長。中口、橋本兄弟を頼って旧内浦町から東邦酒類に出稼ぎに出る人も多く、社員となって流山に移住した人も少なくなかった。

東邦酒類は40年、三楽オーシャン㈱（現メルシャン㈱）に吸収合併される。この時、東邦酒類の労働組合委員長を務めていた東畑秀雄さん（行延出身）は会社側との交渉、従業員の再就職に東奔西走したという。

友好都市として続く交流

のちに流山市議会議員となった東畑さんは、故郷旧内浦町との架け橋として汗を流した。

61年、秋元大吉郎流山市長が旧内浦町を訪問。これをきっかけとして、翌年の「第10回流山市民まつり」にキリコと唐獅子太鼓が参加した。

63年7月には流山から「市民ふれあい号」、10月には旧内浦町から「町民さわやか号」が出発。友好都市としての交流がスタートした。

平成18年に流山市と能登町は「災害応援協定」を締結。万が一の際、お互い協力して助け合うことを確認した。その後に能登半島地震や東日本大震災が発生。お互いの災害支援を通して、「友好」から「姉妹」都市への機運が高まっていった。

昨年寄贈された市史と広報縮刷版は松波公民館図書室に設置。

流山の小学生を対象にした「自然体験学習ツアー」には、平成18年から143人が参加。

流山市民まつりで能登の特産品を販売。能登の食材は「おいしい」と評判を得ている。

※「万上本みりん」は流山キッコーマン㈱が製造する流山の特産品として受け継がれている。

Interview

能登杜氏や蔵人らによって紡がれてきた能登町と流山市の縁。その源流を知る二人に話を聞いた。

いろいろな世代で交流の輪を広げ、盛り上げていってほしい。

中口一郎さん

なかぐち・いちろう（85）＝上＝

中口政吉、橋本菊二は私の祖父の弟になります。政吉は16歳で北海道の西尾酒造に番頭として就職し、10年で常務取締役になりました。どれだけ出世しても、自分のことを語らず、威張らない人でした。昭和初期に流山に移り、帝国清酒（のちの東邦酒類）の基礎を作りあげた後も、数々の酒造関連会社の役員として活躍しました。杜氏であった菊二は豪快な人物で、彼に声を掛けられ社員として移住した人、季節工や蔵人として働きに出た人など、多くの人が流山に働きに行きました。

流山で定住した人たちにとっては、本当に待ちに待った姉妹都市締結だと思います。今後は、いろいろな世代で交流の輪を広げ、盛り上げてほしいと願っています。

お互いが無理することなく、末永い交流を続けてほしい。

東畑秀雄さん

ひがしばた・ひでお（80）
＝流山市江戸川台西在住・旧内浦町行延出身＝

私は昭和24年、18歳のときに流山に来ました。東邦酒類に勤めていた父の引退がきっかけです。会社は昭和40年に吸収合併されましたが、勤勉で辛抱強い能登出身者は、それぞれ新しい職場で能力を発揮し、役員や管理職として活躍した人も多かったです。

能登の過疎化に心を痛める一人ではありますが、「能登の祭りを見せたい」と何十回も友人を連れて能登に帰っていますし、これからも連れて行くつもりです。

私にとって、故郷・能登町と第二の故郷・流山市の姉妹都市締結は悲願でもありました。今回の締結が一時的な熱気で終わってしまわないように、お互いが無理することなく末永い交流を続けてほしいと思います。

流山市立博物館で『能登町展』

期間中、多くの市民が詰めかけた能登町展の様子

姉妹都市締結を記念した「能登町展」が、流山市立博物館で1月7日から29日まで開催された。キリコやとも旗の模型、あえのことのレプリカのほか、能登町を紹介するパネルや写真、ビデオ映像などを展示。期間中は約3千人が来館し、能登町の魅力に触れた。

博物館の小栗信一郎係長は「予想以上に多くの市民が来場しています。初めて見るキリコやあえのことのほか、能登丼や能登杜氏の酒など能登の食にも興味を示す人が多いです。まだ紹介しきれない魅力がたくさんあるので、実際に能登に行ってみてくださいと説明しています」と語る。

次々と来館する流山市の皆さんからは「すごい。一度能登に行ってみたい」という声も多く聞かれた。展示後は、併設する図書館に能登町コーナーを設けて情報を発信していく予定だ。

❹江戸川

全長約 53 ㎞で、利根川（野田市）から東京湾（浦安市）に至る。かつて太日河と呼ばれ、かなり曲がりくねっていたため徳川家康の命により大改修され江戸川となった。流山は江戸川を利用した水運によって繁栄し、水資源は農業用水として今も田畑を潤す。

江戸川堤は、毎年 8 月下旬の土曜日に開催される「流山花火大会」の会場。

❸近藤勇 陣屋跡

近藤勇が最後に陣営を敷いた地。慶應 4（1868）年 4 月 3 日、新政府軍に包囲された近藤勇は、流山を兵火に巻き込むことをうれい、単身出頭した。この地が新撰組局長近藤勇と副長土方歳三の離別の地となった。

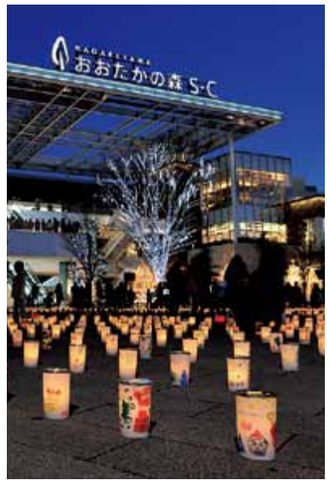
【ACCESS】
つくばエクスプレス（南流山駅、流山セントラルパーク駅、流山おおたかの森駅）
ＪＲ武蔵野線（南流山駅）
東武野田線（流山おおたかの森駅、初石駅、江戸川台駅、運河駅）
流鉄流山線（鰭ケ崎駅、平和台駅、流山駅）
常磐自動車道（流山インター）

❺流山市総合運動公園

芝生広場や野球場、テニスコート、アスレチックなどがあり、11 月初旬に開催される「流山市民まつり」の会場。春は数多くの桜が咲くお花見スポットに。

❻一茶双樹記念館

俳人小林一茶は 40 歳代の 9 年間、流山の白みりん醸造家、5 代目秋元三左衛門（俳号・双樹）宅を拠点の一つとした。市指定史跡「小林一茶寄寓の地」で秋元本家や枯山水庭園などを公開。



❽流山おおたかの森駅前

流山の中心地として開発が進むエリア。駅前広場では、季節ごとに市のイベントが行われる。写真はキャンドルポットとクリスマスイルミネーション。

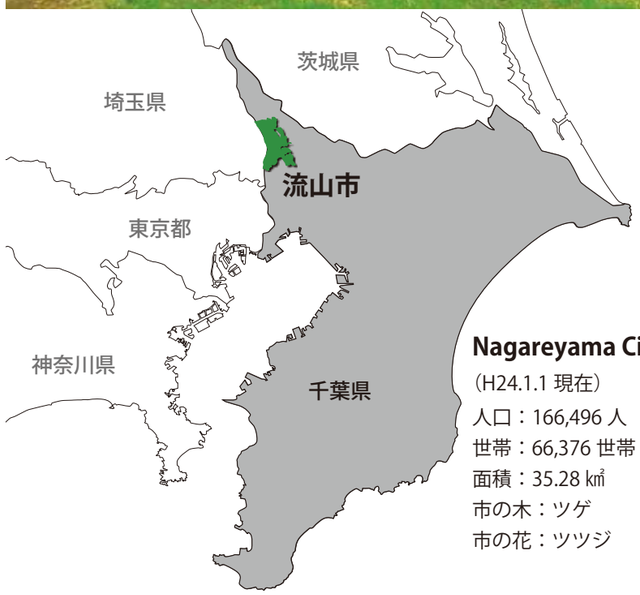
❼赤城神社（大しめ縄）

海抜 15 ㍍の小山（赤城山）山頂にある旧郷社。伝説では、昔大洪水によって上州赤城山の崩れた土塊が流れ着いたのがこの小山で、山が流れてきたので「流山」という地名がついたとされる。

❶【おおたかの森】

東京秋葉原からつくばエクスプレスで約 25 分。広さ約 20 ㌶のうっそうとした森にはオオタカが生息する。緑と共生する流山市のシンボルであり、県立公園としての整備が予定されている。

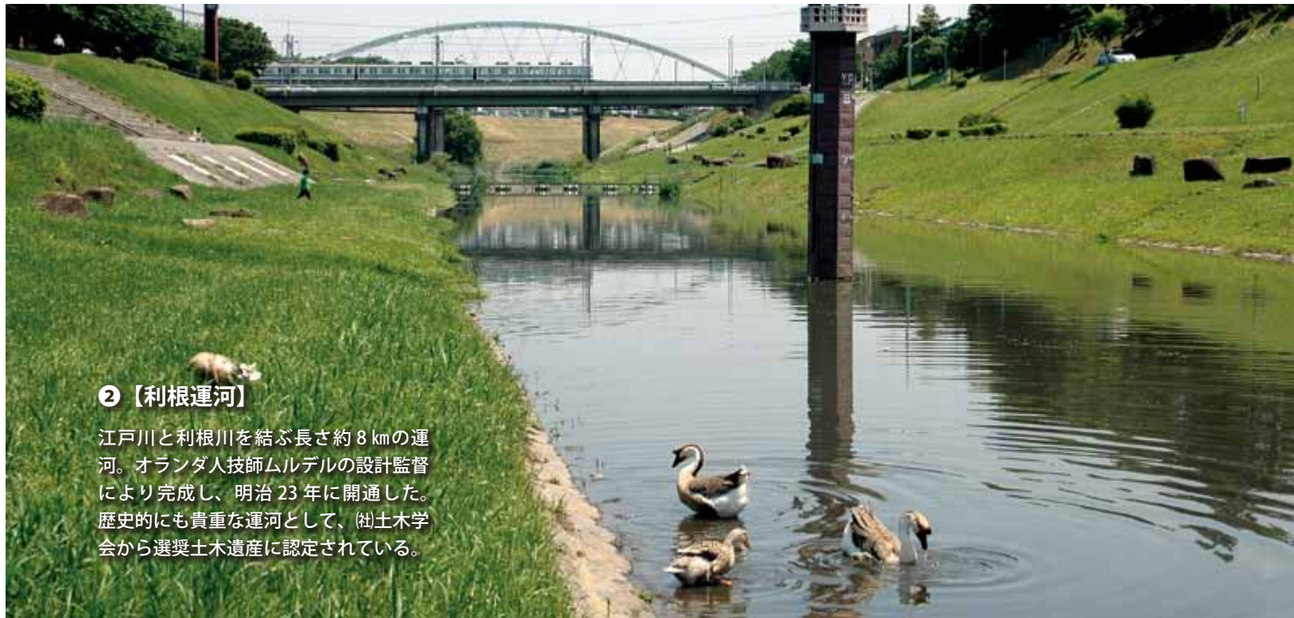
都心から一番近い森のまち



Nagareyama City
（H24.1.1 現在）
人口：166,496 人
世帯：66,376 世帯
面積：35.28 ㎢
市の木：ツゲ
市の花：ツツジ

緑

都心から 25 分。緑豊かな情景が残る流山市のキャッチフレーズは「都心から一番近い森のまち」。都会の快適さと自然のやすらぎを備え、発展し続ける流山市。その見どころの一部を紹介。



❷【利根運河】

江戸川と利根川を結ぶ長さ約 8 ㎞の運河。オランダ人技師ムルデルの設計監督により完成し、明治 23 年に開通した。歴史的にも貴重な運河として、㈳土木学会から選奨土木遺産に認定されている。

友好都市から姉妹都市へ

千葉県流山市と能登町。この気候も文化も違う、遠く離れた市と町の長年温めてきた交流が、「姉妹都市」という形で実を結びました。

1月17日、流山市市制45周年に併せて姉妹都市締結の調印式が挙行され、両市町が念願の姉妹都市となったことを町民の皆さまにご報告します。

能登町と流山市との交流は、古くは能登杜氏をはじめとする酒造りの技能集団が流山の地に活路を見い出したことに始まりました。

その後も世代を超えて受け継がれてきた人的交流が、教育や文化、防災などさまざまな交流に発展してきました。

姉妹都市の絆

流山市と災害応援協定を結んだ8カ月後、平成19年3月25日に発生した能登半島地震の際には、地震発生からわずか3日後に流山市と流山市議会から義援金が届けられました。

私は、その迅速な対応と流山市民15万人（当時）を代表して駆けつけてくれた石原副市長、そして派遣してくれた井崎市長の思いに感動したことを忘れることはありませんでした。

東日本大震災の支援では、流山市はもちろん、流山市と姉妹都市関係にある福島県相馬市へも物資を送りました。

姉妹都市とは、お互いの交流を深めて地域の発展に寄与するためだけではなく、万が一の際には真っ先に助け合える『絆』でもあります。

能登町と流山市がこれまで紡いできた『縁』という糸を半分ずつ持ち寄り、新たな『絆』が生まれました。今後は交流をさらに活発なものにし、信頼をより強固なものにしていきます。

姉妹都市の『絆』を大切に、これからも交流を深めていく。

より広く、より深く、市民レベルでの交流を期待している。

東日本大震災の支援

昨年3月23日、東日本大震災から12日目に東京近辺の水道水から、小さな子どもたちに飲ませることができないレベルの放射性ヨウ素が検出されました。

当時、流山市が災害用に備蓄していた水のほとんどを、津波で甚大な被害を受けた本市の姉妹都市・福島県相馬市に送っており、市内に十分な水がない危機的状況でした。

23日夕方、持木町長に「海洋深層水を送ってほしい」とお願いしたところ快諾していただきました。翌24日の朝には10トンもの深層水が届き、無事小さな子どもを持つ親に配ることができました。さらにこの10トンは、能登町にある深層水の全てを送っていただいたと伺い、感謝で涙を禁じえませんでした。

能登町の皆さまの迅速な、心温まる、総力をあげての対応に心から感謝申し上げます。このご恩を、流山市民は決して忘れません。

広く、深い交流を

昭和初期の能登杜氏の活躍、これまでの友好都市としての交流や能登半島地震、東日本大震災での支援などの積み重ねが今回の姉妹都市締結へとつながりました。

今後は流山の子どもたちが能登町に伺うだけではなく、スポーツや音楽など市民レベルでお互いが行き来し、交流できることを期待しています。

流山は東京から電車で20～30分にありながら、緑豊かでゆったりとした雰囲気の街です。「東京ディズニーランド」や「東京スカイツリー」も近いので、ぜひ流山に遊びにきてください。

姉妹都市締結を機に、能登町の皆さまとより広く、深く交流していければと思っています。

流山市長
井崎義治

能登町長
持木一茂

絆